

地域の集まりの場を残したい

私は開湯930年余の赤湯温泉にて温泉旅館を営んでおります。世の中の流れとして団体旅行から個人旅行への移行がコロナ以前より進んできており、コロナ禍を経てその動きがどんどん加速してきました。

既存の宴会場を小さめの個室会食場に改装し、少し規模の大きい旅館でも30名、40名の宴会を受けられない旅館が増えてまいりました。コロナ禍ではオンライン飲み会、オンライン会議やオンラインサロンなども流行りましたが、やっと対面で気兼ねなく逢える時代が戻ってきた今、膝を突き合わせて一緒に飲み、たわいのない話をしたり交流したりする場所を最後まで残したいと考えました。

オンライン会議は、要点が纏まっていて会議が短く終わるという利点がある一方、発言者以外はミュートにしていることが多いため、進行者やあてられた人以外はなかなか発言をするのが困難です。また、面白いアイデアというものは不規則な発言や飲み会などで少し場が温まった時に出がちなものです。私も若い頃はだらだらと長い飲み会等は苦手だったこともあります。ただ、どんどん年齢を重ね、会社や社会での地位も上がってくると、自分の方針が間違っていないか、皆さんとちゃんと意見のすり合わせが出来ているとか不安に思うことも増えてきました。これがオンラインの会議や飲み会ではなかなか相談することが出来ず、実際に合って会議をしたり、飲み会をしたりということの大切さを痛感したものです。

私は消防団にも18年位所属しています。初めはだらだらと長い飲み会や今は廃止された操法大会の訓練などが苦手でした。ただ、ある程度の期間参加することによって、職業を越えた集まりは一番気を使わなくてよく、心地よいものになってきました。コロナ禍で消防団の夜警が出来ない期間に同期で入った我々の消防団の班のムードメーカーが、残念ながら自ら命を絶つという悲しい出来事がありました。丁度夏から夜警も再開し折角なので外でバーベキューをしようということになり、亡くなった同期も参加予定でした。同期は農家を営んでおり、冬場は仕事がないため、知人より紹介された除雪仕事をやっていたそうですが、そこで結構厳しく注意されたことなどをすごく気に病んでいたようでした。もし夜警がコロナ禍でも中止されずに、そういった悩みや愚痴が聞けていたら今もその同期が存命していたかもという悔いが今でも残っています。今も消防団で集まるとその人の話になることは多いです。

そういったもろもろの事情から、時代には逆行しているかもしれませんが、私はいつまでも地域の人が集まれる場所を旅館の中に守っていきたいと考えています。みんなの笑顔や幸せがあふれ、面白いアイデアが浮かんでくるような場を提供できるよう、スタッフとともにこれからも頑張っていきます。